

三省堂 国語教育

# ことばの学び

a new way of learning Japanese



vol. **12**



特集  
学ぶ意欲を引き出す工夫

# ことばの学び

三省堂 国語教育

a new way  
of learning  
Japanese



vol.

12

## CONTENTS

- I エッセイ コトバはファンタジー ときありえ

### 特集 学ぶ意欲を引き出す工夫

- 2 教材(学習材)のおもしろさに触れさせ、学ぶ意欲を引き出す 吉川 芳則  
6 教えたくなる授業づくり —教師の意欲回復のために— 河野 智文  
8 学習意欲を向上させる取り組み 植松 雅美  
10 小学国語 いつでもどこでも自由帳 —入学式の次の日から— 伊崎 一夫  
11 中学国語 グループ学習で意欲を引き出す 宮城 洋之

### 実践交流

- 12 中学国語 三色ボールペンを活用した説明文の指導 —「ホタルの里づくり」を通して— 増川 孝  
14 中学国語 生徒の気づきを生かして詩を読む授業 田中 伊礎子  
16 小学国語 グループでの話し合いにより「自分の考えを深め、広げる」授業 伊井 恵子  
18 小学国語 低学年のみんなで創る詩の授業 —「うんとこしょ」(谷川俊太郎)— 川畑 秀成  
20 名著再読 徳川夢声『話術』を読む 長谷川 孝士  
22 本から読み解く今の子ども 第1回「等身大」をもとめて 宮川 健郎  
23 メディアと言葉を考える 第1回 メディアとは何だろうか 堀田 龍也  
24 子どもと本の現場から 01 働く「カッコいい」おとなたち 代田 知子  
25 平成18年度版中学校教科書『現代の国語』訂正のお知らせとお願い  
25 編集後記

表紙イラスト  
園田カナコ

デザイン  
design Seeds  
瀬戸早苗

エッセイ

# コトバはファンタジー

## ときありえ

ときありえ 児童文学作家。翻訳家。『のぞみとぞぞみちゃん』（理論社）で日本児童文学者協会新人賞。主な創作に『海の銀河』、翻訳に『ゆきのしたのなまえ』（いずれも講談社）ほか。

コトバって、つくづく不思議です。たとえば、家のガラス窓いっぱいに見えているイチヨウの木。

イチヨウ。いちよう。銀杏。どう書く（読む・聞く）にせよ、イチヨウというコトバと、目の前の緑は別ものです。なのに、イチヨウというコトバで、あの緑のものが表せて（現せて）しまう！

つまり、あの緑のものがもつ意味のすべてが、イチヨウというコトバに変換されているということでしょうが、これは奇跡ともいってべき大飛躍、ほとんど魔法、まさにファンタジーだと思ふのです。

ファンタジーとは、ギリシャ語のファンタスマ「存在しないものを存在させる意識の働き」からきているそうです。

『ハリボタ』から『指輪物語』『ナルニア』と、世はファンタジー・ブームですが、語源にてらせば、児童文学ではおなじみのこの手法の本質がよくわかります。

《……そのとき、ミコちゃんのママの頭によつきりツノがはえました。》

と、お話に書くとき、それはママの心に宿ったイライラやカードが、ツノとなって「存在せしめられた」のです。

あるいは、ママなんてきらい！ オニみたい！ というミコちゃんの気持ちだが、ママの

頭にツノをはやさせたのかもしれない。いずれにせよ、心のなかの無形のもものが、「ママのツノ」として、鮮やかにたち現れ（表れ）たというわけです。

まさにこれと同じことが、イチヨウというコトバを読む（書く・聞く）とき、起こるのではないか。その瞬間、コトバに変換された意味としてのイチヨウが、さつそうと立ち上がるのではないか。

三才になる孫のケントに、ナオおばさんが、食卓のリンゴをさしていました。

「これ、お肉よ。」

ケントくんは、にこっとして、

「ちがうよ、パンだよ！」

その後、リンゴは、紅茶、ミルクと、つきつきよび名がかわり、最後は、

「ヒコーキだよ。ぼりぼりたべるの！」

なんとという遊び心でしょう。目下のお気に入りのミニ飛行機。かじったら、なるほどそんな音がしそうです。

三才の子どもは、コトバがいかにファンタジーな代物か、ちゃんとわかっているのです。そればかりか、その抽象性を手だまにたつて、もう遊んでいる！

コトバは奇跡です。が、三才にしてそのコトバを遊ぶヒトの子どもは、さらに驚嘆すべき存在ではないでしょうか。

## 特集

# 学ぶ意欲を引き出す工夫

効果的な学習のためには、何よりも学習者自身の意欲的な取り組みが必要で、す。どのようにして意欲を引き出すか、理論と実践の両面から迫ります。

## 教材(学習材)のおもしろさに触れさせ、 学ぶ意欲を引き出す

兵庫教育大学

吉川 芳則

### 一 はじめに

子どもたちは学ぶことを求めている——授業を見るたびにいつもそう思う。新しいことを知りたい、今までできなかったことができようになりたい、そんなメッセージを子どもたちは常に発している。元氣いっぱいこの授業はもちろん、しんとした授業であっても、子どもたちの学ぶことへの飽くなきエネルギーは、教室のあちこちにその芽を見出すこ

とができる。

授業後に、「だんだんと元気がなくなってしまつて……。」という類の反省を指導者から聞くことがある。しかし、そうした場合でも、たいていは子どもたちのせいではない。もう少し指導のあり方が違っていれば、意欲的に学んでいただろうなと思うことの方が多い。彼らがもともと持っている学ぶ意欲、エネルギーを、指導者としては上手に、そして確かに引き出す授業づくりをめざしたい。繰り返

返し引き出された学ぶ意欲は、自ら学ぶ意欲へと変わっていく。

そのためには、教材(学習材)のおもしろさに触れさせることが不可欠である。「この小説には、こうした味わい方もあったのか。」「仲間と討論することで、このテーマに関する異なる見方ができるようになった。」等のことから実感できた学習者は、小説の読み方、議論のための準備に主体的になっていく。

本稿では、こうした教材のおもしろさに触れさせるための工夫について、読みの授業を中心に、学習課題、学習活動、ノート・ワークシート、の三つの観点から述べてみたい。

### 二 学習課題の工夫

子どもたちがめあてを持ち、集中して学習に取り組んでいる授業では、たいていの場合、当該教材の持つおもしろさに触れるような内容となっている。この点からすると、彼らの学習への意欲が喚起されるかどうかは、学習課題の内容、質によるところが大きいと言える。学習課題の設定については、子どもたちが自ら学習課題を作つて、それに基づいて授業を展開していくのがよいとする意見がある。教師が与えた課題によるのでは、子どもたちの主体性が保障されないというのである。

しかし、こうした方式は、一見学習者の思

いや読みを大事にしているように見えるものの、問題点も抱えている。それは、子どもたちにとれほど当該教材の本質を読むのにふさわしい課題を設定できるのか、ということである。

子どもたちが作る学習課題というのは、部分的であったり、周辺的であったりするものが多い。結果、それら多くの課題を教師の方で体よく整理し、お眼鏡にかなう課題だけを残して、これを学級全体で取り組む課題としよう、という流れになりがちである。その時点で、せっかく作った課題をうやむやにされた多くの子どもたちの学習意欲が萎えていたとしても、不思議ではない。

授業を展開していくための大もとの、大きな学習課題は、教材研究を十分にし、深く当該教材のよさを理解している教師が、子どもたちが自力で読み深めていくことのできる筋道をきちんと想定した上で設定していく——このことが必要なのではないか。当該教材の持つ本質、おもしろさに触れ、学習の質を高めていくためにふさわしい課題を設定し、学習者を新たな学びの世界へ適切に誘うことは、授業づくりにおける重要な教師の仕事であると認識したい。

教師が設定した課題であっても、そこから読み深めていくための自己課題が次第に喚起

されていくのであれば、主体的な読みの学習は成立する。学習（読み）の大きな方向性は教師がしっかりと舵をとってやり、その課題に沿う形で学習者一人ひとりが自己の学習（読み）のめあてを持てるようにすることで、意欲的に取り組める学習となる。

### 三 学習活動の工夫

#### 1 学習形態を多様に

一時間中ずっと教師が問い、それに子どもたちが答えていくだけの授業であったら、一部の子を除いて、たいていの子どもたちの集中力は途絶え、重苦しい雰囲気になることは容易に想像がつく。これでは、当該教材の持つおもしろさに触れることなど、到底おぼつかない。

改善策の一つとして、学習形態の面から学習活動に変化をつけることをあげたい。隣どうしペアでちょっと相談するということなどは、頻繁に取り入れるようにする。長々と相談・交流する必要はない。三〇秒で、一分で、という具合にほんのわずかな時間で確認しあうことも、継続して取り組めば十分可能である。また短時間で行うことが授業に緊張感をもたらしことにもなる。

グループでの学習も取り入れたい。単元構成によっては、この一時間は終始グループで

という場合もあれば、一時間の中のこの部分はグループで意見交流とそのまとめを、という場合もあるだろう。

大事なことは、ペア、グループでの学習を、これらの形態が持つ特質や効果に応じて、一斉型の授業にバランスよく取り入れ、話し合い活動を活性化させ、新たな考えを創造する契機にすることである。学級全体の場では、自分の意見を恥ずかしくて言えない子も、ペアの、グループの意見としてなら発表しやすという効用も期待できる。

#### 2 協働する学習を

こうして様々に形態を変えて学習に取り組むことは、仲間と協働する学習を志向するということでもある。一斉型の授業だけにとらわれずに、学習とは仲間と協働して新たな価値を創造することだ、という実感を得させるようにしたい。協働して学ぶことの意義を身をもって体験した子の学習への取り組み方は、自ずと意欲的なものになっていく。

もちろん協働するということは、子どもたちにとっては苦勞を伴うものでもある。しかし、異質な考えに触れ、それらをどのようにまとめ一つの意見として整理し、高めていくか、そのプロセスと、そこで得られた成果に価値を見出すところに、学校という場での学習意義がある。

はじめはうまくいかない協働作業であっても、協働することそのものが学びであるという自覚を持って、そうした学習力を地道に育てていきたい。

### 3 言語活動の関連を

先に述べたように、教師の問いに口頭で答えることに終始する授業では、多くの子どもたちのやる気を引き出すこと、教材の持つおもしろさに触れさせることは難しい。ここでは、形態面での工夫に加えて、言語活動の関連という面からも学習活動のあり方を見直してみたい。

例えば、ペアやグループで話し合う際にも、まず自分の考えをノートに短く書きつけ、それを読んだり参考にしたりしながら仲間に伝えるようにするなど、読む、書く、話す・聞く活動を連動させることを積極的に試みるのである。

こうした言語活動の関連については、かつて、青木幹勇が提唱した「第三の書く」が参考になる(注)。第三の、というのだから、「第一の書く」「第二の書く」があり、青木は「第一の書く」は、書写(習字)、「第二の書く」は「作文」であるとした。その上で、それら以外の授業中に行われる書く活動をまとめて「第三の書く」と命名したのである。

具体的な「第三の書く」の活動としては、

視写、聴写、メモ、筆答、書き抜き、書き込み、書き足し、書き広げ、書き替え、書きまとめ、寸感・寸評、図式化等を置いている。そして、これらの書く活動を「読むために書く」「書くために読む」という大きく二つの機能で分類し、授業の中での積極的な活用を促した。

「読むために書く」は、叙述内容を的確に読み取るために書く活動を位置づけるもので、右にあげた書くことのうち、「書き替え」以外のものが該当するとしている。「書き替え」は「書くために読む」に当たるものとしており、物語文などにおいて、登場人物になってその話を書き替える学習などがある。青木はこれを「変身作文」と呼んだ。登場人物に変身し、叙述内容を書き替えて作文しようとする、必然的に本文をしかりと読み込むことになるので、こうした活動は「書くために読む」ことになるのである。

「第三の書く」の実践は、小学校が中心であるが、中学校においても十分に生かせるものである。例えば、メモをすることなどは、ノート指導と関連させて、頻繁に、そして自在に子どもたちが実践できるよう導入したい。授業中、友達や教師の発言内容について、自分の読みや考えと比較して、類似点や差異点を適宜簡潔にノートに書きつけ、新たな自己の

読みや考えを生むものになるようにさせるのである。教師から指示された内容だけを、指示された時間にのみ書くという学習スタイルからの脱却も、小学校高学年以降では必要である。

また「筆答」なども頻繁に取り入れたい「第三の書く」である。発問に対する応答を書いて行う(筆答する)というものである。青木は「発問―挙手―指名―応答―評価」という授業スタイルが一部の限られた子どもによって進められている状況を打開するために、この筆答が有効であるとしている。

ただネットは、時間がかかることである。青木はこれに対して、多発になりやすい発問を整理すること、特に重要な発問に限って筆答を加えることが大切であるとしている。これは、授業の中心をどこに、何に置くかを授業者自身が問い直すことにもなるため、授業改善の視点からも意義があるだろう。

「第三の書く」の考え方、アイデアに学び、言語活動の関連を意識して、教材の持つおもしろさに触れさせる学習活動を工夫したい。

## 四 ノート・ワークシートの工夫

### 1 画一性からの脱却を

ノートやワークシートには、思考を促し、考えを整理し定着させる機能がある。教材の

持つおもしろさに触れさせるためにも、活用方法を充実させたい。

ただ実際には、書き方等、型にはめる状況がしばしば見られる。ノートについては、線の弾き方等も含めて、ワークシート以上に細かい指導が必要であることはわかる。しかし、学習者にすれば指定された内容を、指定された時間で、指定された形式で書くよう求められることが多い。自由度が低く、自由裁量の余地が少ない。

このような傾向は、ワークシートでより顕著である。ワークシートの中には、問い、指示内容、書き出しの文まで、全部細かく記されているものもある。ざっと見れば、この時間は何をやるのかわかってしまう。学習の見通しを持つことができる点ではよいことかもしれないが、学習者にしてみれば、予定は完全に決まってしまっていて、そのとおりに進んでいるのだ、次はこれをするんだな、という感覚になる。あまりに予定調和的というか、興ざめする感じである。

言い方は変だが、もう少し不親切、不十分なワークシートでもよいのではないか。罫線や枠は必要だが、細かい問いや指示の類は最低限度にとどめて、ナンバリングだけしておく。「このことについて、①番のところを書いてみよう」「この場面の○○の心の中のこと

ぶやきをAの枠に書き込んでみよう」などと、発問・指示は口頭で行い、あとは自由に書かせる。

ノートにしても、大枠の書き方は統一させても、書いてあることがよくわかるように、思考の筋道が見えるように、色の使い分け等も含めて細部は工夫するよう、その都度意識させていく。

また、友達の意見や、それらを聞いて新たに浮かんできた自分の考え等を自由に、その都度自由に書き加えられるようなスペースとルールも確保しておきたい。

## 2 つくり上げていく楽しさを

こうした自由度の高いノート・ワークシートには、学習者自身がつくり上げていく楽しさがある。はじめはうまくまとめられなくても書き方の指導と並行して、互いのノート・ワークシートを見せ合い、評価し合う機会を意図的、定期的に設けることで、次第にその子らしい個性的なノート・ワークシートになっていく。それはそのまま、教材の本質、おもしろさに迫っていくプロセスでもある。

その子に応じたノート・ワークシートの進化を認めていくこと、そのことが、その子の次のノートづくりへの意欲を引き出すことになる。差異性を積極的に評価できる教師でありたい。

## 注

青木幹勇「第三の書く 読むために書く 書くために読む」国土社、一九八六年



きつかわ よしのり 公立・附属学校教員、教育委員会指導主事を経て、現在、兵庫教育大学教授。説明的文章領域を中心に、楽しく、力のつく授業のあり方について研究を進めている。

# 教えたくなくなる授業づくり

## ―教師の意欲回復のために―

福岡教育大学

河野 智文

### 一 はじめに

―教室へ向かう足取りは軽やかか―

すべての児童生徒の意欲を等しく喚起する学習内容や方法は存在しない。しかし、だからといってあきらめるわけにはいかない。教師は最大にして最善の成果を求めて、来る日も来る日も工夫を重ねる。もちろんそれらが常にうまくいくはずはなく、時として深い徒労感に襲われる。児童生徒の意欲を喚起する役割を担う教師自身の意欲が、喪失の危機にある。教室に向かう廊下で「今から授業ができる」と、授業を心待ちにする思いのうちに、自分を置くことができているだろうか。

教科指導において教師を襲う徒労感の源は、「できない」ことにあるのではなく「できるはずのことをしない」ままに教壇に立たねばならないやるせなさにある、と私は思う。

もう少し時間があれば、あんなことやこんなことも授業に取り入れ、児童生徒の目を輝かせることができるはずなのに、という思いである。これまでの仕事は減らず、新しい仕事がか次々に降ってくる。時間は有限。となれば、いちど経験した仕事のための準備時間は後回しにされる。「昔教えたことのある教材だから」という理由で、教材研究のための時間は削られる。教室にいるのは、昔の児童生徒ではないのに。「したいこと」が「せねばならぬこと」に押しつぶされていく。そこに、ストレスの源があるように思う。

### 二 「もうひと手間」を授業づくりに

しかし、そうであっても、今少し、授業づくりに時間を割いてみてはいただけないだろうか。

教材研究の面では、まず、教材をゆつくり

と丁寧に音読してみる。よく準備された範読だけでも、じゅうぶん彼らを引きつけることができる。

そして、教材を書き写してみる。時間がなければ部分的な視写でも良い。そして気付いたことを次々に書きこんでいく。不明な点は調べる。紹介したい豆知識が次々に見つかる。こうした作業は、手間はかかるが、やはり手書きが良い。

今までは、その場の即興的なやりとりからのひらめきに頼っていた発問や板書を、予め書き出してみても、そのつながりや構成を検討する時間を持つことも試してみたい。何かひと手間、授業前に加えてみていただきたいと願う。

### 三 教師の相互交流

教師相互のつながりの回復にも期待したい。脇目もふらずその日の仕事に没頭し、気がついたら帰宅の時刻、挨拶もそこそこに学校を飛び出す、という姿が実情だろう。六日制への郷愁を聞くと、最も多いのが土曜の午後の時間を取り戻したい、という思いだ。目的、評価、効率とは無縁の時間だったけれども。

授業について、もっと同僚と語り合う時間をつくりたい。私が参観させていただく研究



授業の中には、明らかに「はずれ」のくじを引かされた人がしぶしぶ務めている、というものもある。しかし、きっかけはそうであったとしても「して良かった」と思えるのは、授業に至るまでの過程で周囲の教員との協力や議論が成立していることがうかがわれ（その意味で「丸投げ」は言語道断である）、よそ行きの「協議会」のあと、授業者の先生を他の同僚が囲む雑談の輪が自然に形成されるからである。「こんなことで悩んでいるのは私だけではないか」という懸念は、職員室という同じ空間の中にいる同僚の間でも発生している。

#### 四 願いと仮説を持って教室へ

実際のところ、教師の多忙化、とくに時間の不足についての提案を、この小稿は持ち合わせていない。そのことを恥じつつ述べさせていただければ、ひとつで良いから「伝えたいこと」を持つこと、児童生徒の反応を通して確かめたいことを「仮説」として携えて教室に向かうことである。

前者は指導目標や評価規準にできるかもしれないし、そうならなくても、教師自身の思いや願いのようなものであって良いと私は考える。大学生が記述する「印象に残った国語の授業」の中に、「先生が最初から最後まで

話してくれた授業」が必ず一定数含まれることが、このことの意味を語っている。彼らは、授業にかける教師の思いを受けとめ、教師の持つ専門性に圧倒されたのである。まずは教師自身が、教える内容に深い興味を持ち、「これを知らずにすませるとは、なんともつたいない」と、児童生徒に伝えてほしいと思う。学ぶことはおもしろく、やりがいのあることだ。決して、勉強は苦しくつまらないけれども頑張ろう、などとおっしゃらないでいただきたい。

後者は、教育実習で私を鍛えてくださった指導教官の教えである。このことを確かめたい、私の工夫したこの方法を、児童生徒はどう受けとめてくれるだろうか。そう思うだけで、授業が楽しみになるし、一回ごとの実践が意味あるものとして自分を成長させてくれる、そう教えていただいた。研究授業の指導案にも、本時で検証したいこと、授業者が見てほしいところ、訴えたいことがもつと端的に記述されるようになれば、と思う。

#### 五 おわりに

むろん、このような構えには問題もある。「教え」に偏り、授業展開が強引にならないか、教えたいことが増えずぎて、詰め込みになってしまわないか懸念される。

そこで、教えたいことを「教え」の文脈でいちど並べてみたうえで、距離を置き視点を變えて眺め、組み替えたり精選し（捨て）たりする勇気が必要になるのだが、本稿ではそこに至るまでの、まずは授業者自身の内発的な意欲形成への期待を述べた。

授業準備にかけた熱意は必ず伝わる。授業に「不思議の負け」はないのだ。



かわの ともふみ 福岡教育大学助教授。国語単元学習の歴史的研究が主要課題。国語教育史における実践の重みを常に痛感している。

# 学習意欲を向上させる取り組み

ILEC言語教育文化研究所  
植松 雅美

学習意欲の向上を図るには、身につけさせたい力を明確にした学習課題を設定することが核になる。その上で、子どもの発達に応じた学習方法、学習形態、学習材等の創意・工夫が求められる。

また、目標を定めて子どもが主体的に授業作りに参画することが意欲向上につながる。教師が学習条件を整え、子どもが学習主体として意思的に活動できるように授業を創り上げていきたい。以下、三事例をあげ具体的に述べる。

## 一 学習課題を焦点化する

椋鳩十の作品である「大造じいさんとガン」(大日本図書、一九六八年)の学習材では、ガンの頭領の残雪が仲間を救うためにハヤブサと戦う場面が多くの子どもの感動を呼び起こす。ある授業での学習課題は「大

造じいさんの心を大きく動かしたのはどの場面か」と設定された。

子どもが取り上げた場面は二箇所集中した。一箇所は、大造じいさんにとりとして飼われていたガンを守ろうとして残雪がハヤブサと戦う場面である。「大造じいさんは、ぐっと銃を肩にあてて残雪をねらいました。が、なんと思っただか、また銃をおろしてしまいました。」の叙述である。これまで、残雪を撃つために苦労し続けてきたじいさんが、ここで急に残雪を撃つことをあきらめてしまった心の変化をとらえたからである。

もう一箇所は、ハヤブサとの戦いに傷ついた残雪が、大造じいさんが近づいても「残雪はもうじたばたさわぎませんでした。さいごのときを感じて、せめて頭領としての威厳をきずつけまいと努力しているようでもありません。大造じいさんはつよく心をうたれ」を

指摘した。ここでは、残雪という鳥に対して強い感動を覚えたからという理由からであった。本授業では、大造じいさんの心の変化に焦点を絞って子どもたちは考えを述べ合った。友だちの根拠に納得して自説を変えた子どももいたが、最後まで自説を変えずに自分の考えを発表する子どもも少なくなかった。焦点化された課題が明確なため、意欲が持続した授業であった。

## 二 体験を踏まえた学習を工夫する

小学校一年生での「上位語、下位語を学んで語彙を広げる授業」である。

子どもたちは授業に入る前に、生活科の時間を使って、魚屋、八百屋、お菓子屋などの店先にある品物を実際に見学し、いろいろな物の名前を収集した。教室に戻って「さかなや」「おかしや」などの上位語には「さんま」や「クッキー」などの下位語が含まれることを認識しながら類別して学習カードに記入した。その後、生活班のグループ毎に小黒板を使い、上位語と下位語を対比させ整理した。最後に各別に学んだことを全体の中で発表し、意見を交流し合った。

語句・語彙の学習は一般的に机上の学習に終始し、学習意欲が高まらず学力が十分に定着しないことがある。本授業では、体験を通

し、生活に結びつけながら学習を展開したことで、活動の意欲が高まり、学力の定着も図られた。

### 三 達成感を味わわせる

「子ども区議会に提案する原稿を書く」ことを課題にした単元が設定された。「地域を点検し危険な箇所を見つけ災害に備える」ことをテーマに、班活動で情報を収集し、問題点を明らかにした。さらに詳しく情報を収集するために、学校図書館や公共図書館、インターネット、新聞、テレビなどから情報を集め、意見をまとめた。

学級全体で提案を交流するために、司会者と記録者を交代で分担し、話し合いを進行した。各班が地域毎の実態、課題、解決策を写真やデータを示しながら発表した。さらに全体で質問や意見を出し合い協議した。グループ単位で質問に答えたり補足説明を行ったりしたことや、全体協議で全員が発言し、話し合えたことは、子どもたちに達成感をもたらしたようである。その後、話し合いで深まった内容をさらに推敲し、全員が区議会への提案文を書き上げた。

ここでは、学習過程における、話す、聞く、読む、書くといった活動が主体的に行われたこと、また区議会への提案文を完成させ

たことが、学習意欲の向上につながったといえる。

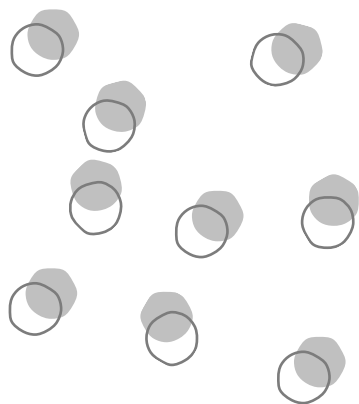
### 四 終わりに

子どもが意欲的に学習するためには、それぞれの学習課題をもち、自らこれを調べたり考えたりしていく学び方を重視しなければならぬ。そのためには学校図書館の活用が欠かせない。課題を調べるために必要な図書情報を探し当て、読み調べて思考し、自分なりにまとめ、資料をつくり上げる学習活動に意義がある。受動的な学習から能動的な学習への転換である。学校図書館は、読み物を読むだけの施設ではない。主体的に学ぶために活用する学習センターである。子ども自ら学ぶうとする意欲を図書資料活用によってはぐくみたい。

「総合的な学習の時間」との関連で学校図書館を利用する例をあげる。国際理解教育の領域で「関心のある国と日本の文化の違い」という課題に取り組ませる。子どもたちは、「○の国の子どもたちの遊び」といったような自分に関心のある課題を設定する。次に課題に即して情報を集める。集めた情報から必要な内容を選択し、要約する。これに自分の考えを入れて文章をつくり上げる。この学習活動は、子どもたちの主体性を生かしたもので

あり、意欲を持続させるはずである。ここでは、情報収集力、情報選択力、要約力、表現力、そして伝え合う力などが身につくのである。

教師が、子どもの疑問やつまずきに目を向け、確かな学力をつけるためには、個々の子どもへの指導、支援が重要なポイントになることはいうまでもない。発達段階に応じた具体的な指導の工夫を期待する。

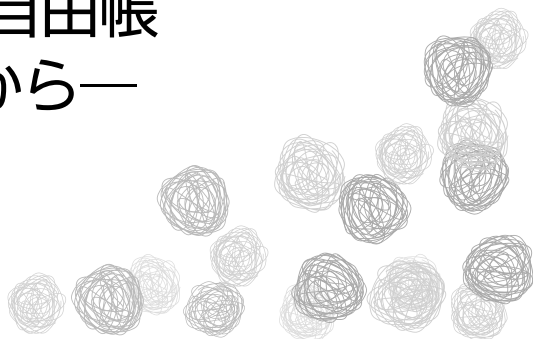


うえまつ まさみ 東京都立教育研究所統括指導主事、公立小学校長などを経て、現在玉川大学講師、ILEC言語教育文化研究所常務理事。この間、全国公立小・中学校女性校長会会長、全日本図書館研究会会長を務める。主な編著書に『聞く力・話す力をはぐくむ国語科授業』『コミュニケーションの力をつづける国語の授業』『読解力をはぐくむ授業の展開』（東洋館出版）などがある。

# いつでもどこでも自由帳 —入学式の次の日から—

兵庫県三田市立けやき台小学校

伊崎 一夫



一年生は、話したくて仕方がない。聞いてみたくて仕方がない。書きたくて仕方がない。この表現意欲を活用しない手はない。

何を使えばいいか？ 自由帳である。自由帳だから、入学式の次の日から可能である。次のような「伝え合い」活動を行えばよい。

- ① 書きたいことを書きたいように書く
- ② 発表したい子どもが自主的に発表する
- ③ 質問を受け応答する
- ④ 伝え合いの成果を目に見える形にする

下の自由帳は、入学式の次の日、4月11日に発表されたものである。家の駐車場に蜂の巣があったことが記されている。



二階への階段途中にある窓から蜂の巣を見たという状況まで描かれている。絵中心の自由帳である。これだけの情報量があれば「③質問を受け応答する」ことが充分にできる。

質疑応答は話形練習の生きた場となり、発表内容は焦点化していく。質問の観点を整理していくことによって、話題のつなぎ方や対象への迫り方を具体的に学ぶこともできる。「④伝え合いの成果を目に見える形にする」

ことも決して難しいことではない。蜂の巣という「もの」があったんだね、それが発見だね、という押さえをしておく。

下の自由帳は、4月12日に書かれたものである。学校探検での発見が記されている。保健室は子どもたちの興味関心を引きつける。普段使うトイレとは違った形のトイレがあったという内容である。画面下の「かたち」と書かれている部分に注目したい。前日の「蜂の巣」で学んだ伝え合いの成果である「もの」という観点が、「かたち」へと焦点化されている。



子どもたちは書きたくて仕方がない。だから自分が使いうる表現技法の全てを総動員して書き続けていく。その結果、多くの情報を正確に伝えることができる文字表現を中心とした自由帳へと無理なく推移していくのである。いつでもどこでも自由帳である。

いさき かずお 兵庫県三田市立けやき台小学校教諭。第35回博報賞並びに文部科学大臣奨励賞を受賞。堀江祐爾（兵庫教育大学大学院教授）と「授業づくり実践セミナー」を実施。

# グループ学習で意欲を引き出す

東京都杉並区立荻窪中学校  
宮城 洋之

## グループ学習の意義

研究授業を拝見する機会が度々ある。その多くはよく練られた指導案に基づいたものであるが、生徒の学習活動の面から見ると、必ずしも意欲的に授業に参加しているとは言えない場面も目にする。これは授業のねらいや学習内容の問題というよりも指導方法の問題であることが多いようだ。

たとえば教師の発問に対する反応が鈍かったり、課題への取り組みが浅かったりするような場合、グループによる話し合いや討論を取り入れることで授業を活性化することが可能である。

一人の学びよりも、異なる意見をもつ者同士の間から生まれる共同な学び合いを組織すること。これがグループ学習の意義である。

## グループ編成のコツ

グループ編成のコツとして次の三点がある。

- ①人数：生徒数や生活指導といった要素にも左右されるが、一グループ四名程度が適切。
- ②メンバー：グループ間は等質、グループ内は異質であることが望ましい。学力差のある生徒同士で編成することによって相互の学び合いを活発にすることができる。

③リーダー：リーダーの存在がグループ学習の正否を握っている。課題を理解し、グループ内の発言や話し合いを指示できる生徒を選びたい。

## 共同で乗り越えるハードルを

難易度の低い一問一答的な課題では先に述べたような意義を実感させることはできない。グループ学習は集団で取り組む価値のある課題があつてこそ成立する。

たとえばそれは「なぜ王が殺したのは妹婿（賢臣アレキスという順序なのか）（『走れメロス』）」という読みの追究を促す課題であったり、「レ点を付けて訓読できる熟語をいくつかあげられるか」（漢文）といったグループ同士の競い合いを促すゲーム的要素をもつ課題などである。

グループ学習は生徒の学ぶ意欲を引き出すために有効な方法である。時間がかかり過ぎるという意識をもつ方も多いが、ポイントを絞り、計画的に導入することで質の高い学び合いを実現できる。

みやぎ ひろゆき 東京都杉並区立荻窪中学校主幹。  
現在の関心はクリティカルな読みの力と論理的な表現力の育成。

# 三色ボールペンを活用した説明文の指導 ―「ホタルの里づくり」を通して―

東京都板橋区立高島第一中学校  
増川 孝

五年程前に『三色ボールペンで読む日本語』

(齋藤孝著、角川書店) を読んで以来、私は日常生活において三色ボールペンを愛用している。三色ボールペンとは青、赤、緑の三色から成り、文章を読む時に「まあ大事」と思ったところには青線を引き、「すごく大事」と思ったところには赤線を、「おもしろい」と思ったところには緑線を引きながら読んでいくというものである。これで線を引きながら読んでいくと、集中力が高まり、文章の内容がぐいぐいと頭の中に入ってくる。また、後でその文章を読み返すときも三色の線が入っているとしても役立つ。青線や赤線により文章の要点が浮き彫りになっているし、自分にとって大切だと思った箇所が赤線や緑線ですぐに見つけられるからである。他にもいくつかの効用があるが(齋藤氏の著書参照)、そうした効用を体感した私は三年程前から三色ボールペンを国語教室に取り入れている。これから紹介するのはその一例である。

## 単元「自然環境について考えよう」

〈つきたい力〉

- 説明文の文脈を読みとる力
- 説明文を心に響かせながら読む力

〈学習の流れ〉

(二次・3～4時間)

①「ホタルの里づくり」(『現代の国語2』)を各自黙読し、三色ボールペンで線を引く。

青線↓話の筋をとらえる上で大事。  
赤線↓筆者の主張をとらえる上で特に大事。  
緑線↓興味をもった。心に響いた。

②意味段落(教室では「内容のかたまり」と呼んでいる)、引くべき青線、赤線を確認する。

\*生徒に答えさせながら適切な箇所を確認

していく。確認された箇所には蛍光ペンの青、赤を入れさせる。これにより生徒は自分の引いた線が妥当であったかどうかを確かめる。

③確認された線をもとにして意味段落毎に小見出しをつけ、話のおおよその流れを把握する。

\*最初は教師がまとめて小見出しとどういふものかを理解させる。その後は生徒自身にまとめさせ、答えさせながらふさわしい小見出しを確認していく。

④各自が引いた緑線を発表し合う。

\*緑線はどこに引いても自由。青線や赤線と重なってもかまわない。教師はどんな箇所についても共感的に受けとめる。どういふことからその箇所に緑線を引いたのかをコメントでできる生徒にはコメントさせる。発表を聞きながら特に共感できる箇所には蛍光ペンの緑を入れさせる。教師が緑線を引いた箇所も適宜示し、コ

メントする。

⑤同様の流れで「魚を育てる森」「めぐる輪」の中で生きる」を読む。

(二次・1時間)

⑥三つの文章の中で引いた緑線のうち、特に自分の心に響いた緑線の箇所(これを「感動系の緑」と呼んでいる)にコメントを記入し、それを発表し合う。



(三次・1時間)

⑦三つの文章を読んだことをもとにして「自然環境についての私の考え」という内容の文章を四百字程度で書く。

\*感動系の緑の箇所を引用し、それに自分の思いや考えを重ね合わせながら書くとき、書きやすいことを示す。ここで「引用」のテクニックを教える。

(事後)

⑧書いた文章を文集にまとめて互いに読み合う。

私は説明文の指導においてはこのような流れを基本としている。説明文は読みながら文脈をたどれること、自分の思いや考えを重ね合わせられることが何より大切だと考えるからだ。そのためには三色ボールペンを活用したこのような学習活動を反復させることが効果的だと今現在は考えている。ご教示頂ければ幸いです。

### 生徒作文例

「ホタルの里づくり」で大場さんは「指の間からのぞいて、ほのかな光を放つホタルを見たときの感動は、たえようもなくすばらしいものでした。」と述べていた。私は野生のホタルなどつかまえたこともないのにここを読んだときにこういう場所が増えたらいいなあと思った。

今の私たちの生活は便利で豊かだ。しかし、人が手を加えず生きてきた便利な場所よりも、動植物が助け合いながら生きている自然の場所の方が私たちにとっては心が安らぐと思う。三つの説明文はどれも人間が一度壊してしまった自然環境を再生しようとしている人々のことが書かれていた。

〜途中略〜私はこの地球上全ての生物が互いに協力し合って生きていけるバランスのとれた世界をつくっていくべきだと思う。今そのバランスが崩れつつある。それは人が人だけの世界をつくらうとしているからではないか。〜以下略〜

ますかわ たかし 教師には深い呼吸が必要だと考え最近ヨガを始めた。今では必須アイテムとなっている。学校でも家でもイライラすることがなくなつた、ような気がしている。

# 生徒の気づきを生かして詩を読む授業

鹿児島県鹿児島市立鹿児島玉龍中学校  
田中 伊礎子

本校は、今年度開校した中高一貫の中学校であり一年生三クラス百二十名が在籍している。

「読むこと」の授業では、日ごろから生徒それぞれの発想を生かし、考えを交流させることを通して、さまざまな視点から考えることの楽しさを味わい、主体的に読む姿勢を育てたいと考えている。

「ウソ」(『現代の国語1』)という詩は、平易な言葉の中にもさまざまな表現技法が仕組まれ、生徒が親しみをもちながらも、深く思考する活動に適した教材である。自由に考えたことを整理し分析すること、また最後に鑑賞文を書く活動を行うことで、あらためてどのような詩なの、その印象を確認することができると考えた。

## 〈授業の流れ〉 全三時間

(第一時)

①「ウソ」という言葉からイメージすること

を挙げる。

②ウソとホントを整理する。

③各自、詩を何度もくり返し読み、気づいたこと、疑問に思ったこと、感じたこと、考えたことをワークシートに書く。(箇条書き 20分)

(第二時)

①前時に書いた生徒の気づきや感じたことをプリントにまとめて配布する。(名前も記入する)

②生徒の気づきや感じたことを、構成・表現・内容の三視点から整理する。

③「ややこしい」「混乱してくる」などと感じるのはなぜか、構成の面から理解する。[※]

④表現に関して「リズムがよい」のはなぜか、使われている表現技法をまとめる。また、「カタカナ、ひらがな表記」についてその効果をまとめる。[※]

(第三時)

①作者がもつとも伝えなかったことは、どんな

なことが、第五連を中心にとまとめる。[※]

②気づきを整理して、「ウソ」という詩についての印象やわかったことを素にして百字程度の鑑賞文を書く。

※生徒の気づきを参考にする。

## 生徒の気づきより(抜粋)

### 【構成】

・五連構成。最初の四連はウソとホントのことについて書いてあり最後の連は違う内容が書かれている。

・最後の連以外は四行で書かれていた。

### 【表現】

・リズムがよい。勢いがある。変わっている。  
 ・「ホントという鳥」なかがホントでなかがうそやらのなどの表現がおもしろい。  
 ・「うそではない」と間を空けているので自分で満足しているような感じがする。  
 ・なぜ作者は最後のところだけ「ホントだ」とせず「ウソではない」としたのか。



・嘘を「ウン」とカタカナで書いているので別の意味にも使っていると思った。

### 【内容】

- ・「水をすくう形に両手のひらをかざね……」は優しい感じがした。
- ・作者は生きていることを実感するためにこの詩を書いたと思う。
- ・息のあたたかさは何かを暗示していると思う。
- ・なぜつなすく必要があるのだろうか。

## 詩を読み気づいたことを見つける活動の成果と課題

### ＊生徒の感想より

○成果 □課題

- わかりにくかったけどわかったとき、頭がスッキリした。
- それぞれにいろんな自分が思いつかないことがあるとても面白かった。
- 分析していくにつれてたくさんのがわかっておもしろかった。
- 様々な視点からより一層深められて楽しかった。
- 詩を全体的に眺めていたらふと気づくことがあった。
- 表現・構成などから工夫を見つけ出すのは難しかった。

以上のような感想から、ある程度十分な時



### 生徒の鑑賞文より

間を確保してひたすら読み続けることにより自分で気づく喜びを感じたり、お互いの気づきを共有することでさまざまな視点から考えたりすることのおもしろさを感じることができたように思う。

一方、なかなか見つけられなかった生徒に対しては、さらに具体的に発見するための手立てを考える必要がある。

○世界に数え切れないほどある言葉。その中からいくつかの「ウン」と「ホント」を取り上げた想像豊かな詩。最初は混乱させられ、最終的に得るものは、真実と確信。「ウン」という詩から、「ホント」が導き出せる。

○ウン・ホントがカタカナで書いてあることで、それ自体がうすつべらくうそっぽい。作者は最後の連で、区別のつかないうすつべらなウンとホントがたくさんある世の中でも、自分の命、存在を忘れてはいけなさと伝えている。

○あえてひらがなやカタカナをたくさん使っているのが、子供から大人まで親しみやすい詩である。ウンとホントのややこしさが、最後には意外なホントが出てきて生きているというところに気づく。

## 鑑賞文を書く活動の成果と課題

### ＊生徒の感想より

○成果 □課題

- 読みとったことの中からまとめることができた。
- 自分でまとめるという活動で詩の深いところまでよく分かった。
- 読む人に詩のよさが伝わるように考えて書くのはおもしろかった。
- 感想文と鑑賞文の違いがよくわからなかった。
- 初めて書いたので難しかった。

「書くこと」と「読むこと」を関連させて学習することは、それぞれの能力を高めてくれる。一度、読解した詩をあらためて書くという能動的な活動を行うことで、自分にとってこの詩をどのようにとらえたのが明確になる。

鑑賞文という文種を、初めて書いた生徒も多く感想文になっていったものも多かったが、あらためてさまざまな種類の文章を書く活動に取り組み書く能力も高めていきたい。

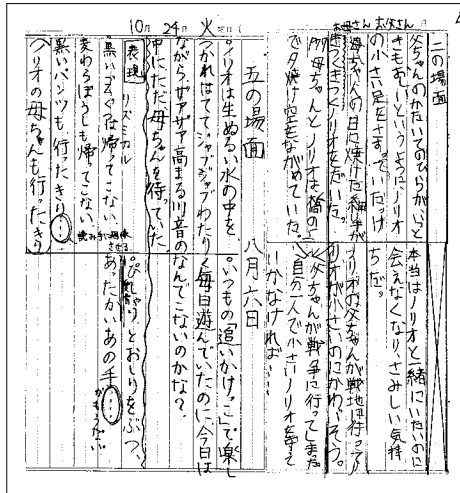
たなか いそこ 鹿児島県中学校研究会国語部会、マルチメディア教育研究会に所属。研究テーマは「メディア・リテラシーを高める国語の授業」。

## グループでの話し合いにより 「自分の考えを深め、広げる」授業

東京都江戸川区立上一色南小学校

伊井 恵子

児童のノートより



「川とノリオ」は作者いぬいとみこさんが子どもにとっては想像することの難しい戦争の時代を、豊かな表現力で描いた作品である。六年生の児童が、優れた表現を味わいながら読み、登場人物の心情をとらえることのでき

る学習材として、たいへん価値の高い物語文である。

### 授業の流れ

一人一人の児童が物語である「川とノリオ」に向き合い、自分の中に「川とノリオ」の作品像を作り上げたいと考えた。そこでまず、一人読みの時間を確保した。叙述をもとに、登場人物の気持ちや場面の様子を想像し、それをグループの友達との話し合いという交流を通して確認し、自分と友達の感じ方とを比べることにした。

話し合いを通して、友達の感じ方のよさや、自分と友達の感じ方のちがいに気づき、一人の読みが深められたり広げられたりすると考えたからである。

グループでの話し合いを充実させるためには、児童一人一人が自分の考えをもって臨むことが前提となる。そのため、ノートにしっかりと書きまとめておくことが必要になる。

ノートへの書きまとめのし方を合わせて指導した。

### ノートの書き方

想像できる言葉や文	想像したこと

### 学習活動

1. 各場面をまず一人で読み、登場人物の心情や場面の様子が最も想像できる言葉・文を選び、ノート上段に書く。下段には、その言葉・文から自分が想像したことを書く。

2. 三、四人ずつのグループになり、順番に司会を務めながら、自分のノートに書いたことをもとに、その場面での登場人物の心情や場面の様子、表現の工夫について話し合う。

## グループでの話し合い



3. 各グループでの話し合いに出たことを全体の場で紹介する。
  4. ノートに参考となった友達考えや感想、工夫された表現などを書き加える。
- そして、学習の最後には、「川とノリオ」を読んだ感想・紹介文・「ノリオへの手紙」の中から自分で選んだ方法で考えを書き、発表することにした。

## グループでの話し合いから

児童が今回の話し合いについて、どのように感じているか、自由記述してもらった。

1. 登場人物の気持ちを考えたとき、一人だと一つや二つしか考えられないけれど、グループで考えるとたくさんの考えが出た。
  2. 一人で考えるより意見がふえた。
  3. 友達のいろんな意見が聞けた。
  4. 友達の意見が一人一人ちがっていた。
  5. 自分たちの班だけでなくいろいろな班の考えがわかってよかった。
  6. やっぱり人によって感じ方が違う。同じ文章から想像したことが全然ちがっていて、おもしろかった。
  7. 一人の人が意見を言うのと、それに対してたくさん聞き返しができた。だから登場人物の気持ちもそうだったのかもしれないと思えた。
  8. 他の人の意見を自分の考えのまとめに取り入れることができた。
  9. 自分から言い出したことについて、みんなが一生懸命話し合ってくれたので、自信がもてた。うれしかった。
- 以上のように、児童自身もグループでの話し合いの有効性を感じていることがうかがえた。
- これらのことから、一人読みを確保した上で、友達との話し合いによる交流によって、読み深め・読み広げができると考えられる。

発問され、読まされる国語学習から、一人一人が自分から読み、考えることでそれぞれが自分の「川とノリオ」像を作り上げることを目指した拙い実践である。

## 児童の感想より



いい けいこ 東京都江戸川区立上一色南小学校に勤務。日本国語教育学会小学校読むこ部所属。第69回国語教育全国大会提案・シンポジスト。

# 低学年のみんなで作る詩の授業

—「うんとこしょ」(谷川俊太郎)—

東京都豊島区立池袋第一小学校

川畑 秀成

## 一 詩づくり

「うんとこしょ」は、谷川俊太郎の四連の詩である。本文は二行ずつで一連が構成されており、第一連は、

うんとこしょ どっこいしょ  
ぞうが ありんこ もちあげる

となっている。

楽しくほほえましい詩であるが、この詩が、詩たらしめているのは第四連があるからである。第二、三連でも、生きもの以外が「もちあげる」ことで、視点が転化している。けれども第四連の「うたがこころをもちあげる」にいたって、「もちあげる」行為が物理的な力だけではなく、精神的な作用として昇華している。ここに、この詩のすばらしさや魅力がある。低学年の子どもたちにも何とかそのことを、みんなで音読しながら楽しく感じさせたいと考えて授業を構想した。

## 二 授業の流れ(全三時間)

### (1) 一時間目

まず詩の各連で、第一連の「ありんこ」にあたるところを虫食いにして、子どもたちに当てさせる授業をした(注)。

本学級では、第二連の「あめんぼ」と第四連の「こころ」を当てる子どもがいて、みんな驚くともにとでも喜んでいた。そして全文を暗唱する。短い詩でリズムもあるのですぐに覚えることができて、休み時間も、「うんとこしょ」と廊下で声がしていた。

### (2) 二時間目

「○○が□□(を)もちあげる」の部分を各自で創作させた。数多く創らせることを目的にした。いろんな力でもちあげるものを出させたかったからである。多い子は、二十五個も創ってきた。家にもってかえってやっていかとお願いくる子までいた。

### (3) 三時間目

あらかじめ創作したものを集めておいて、教師が選んだものを、短冊に書かせてから黒板に貼らせた。

そして、「ぞうがありんこをもちあげる時は、どのくらい力があるかな? うんとこしょ どっこいしょ、を読んでみて?」と質問した。子どもたちは小さな声で、「うんとこしょ……」と音読した。次に、「もう少し強い力でもちあげるにはどう読めばいいかな?」今度は少し大きな声で読んだ。「それじゃ、もっと力強く読むとどうなるかな?」ある子は、動作を交えながら真っ赤な顔で読んでいた。「それじゃあ、みんなが短冊に書いたものは、三つの力のどこになるか、考えて貼り直しに来てください。」と指示した。子どもたちは、考えながら、三つの場所に貼り分けていった。「力の強さ」という視点をもって貼り直させるためだ。この時、教師が事前に予想したものと違うところに貼って

る子がいた。「カブトムシが○○君をもちあげる」を一番強い力に貼っていた。理由を聞くと、「カブトムシより○○君はとっても重いから、いくらカブトムシでも大変だと思う。」と説明していた。なるほど、その子なりのイメージが根拠となっている。たとえ教師の意図と異なっているとしても、その子の感性をできるだけ大切にしていきたい。この部分は、この説明で他の子どもたちも納得していた。

また、私は「ゾウが恐竜をもちあげる」や「雲が太陽をもちあげる」と「川畑先生が○○先生をもちあげる」が同じところに入ったらどうしようかと思っていた。○○先生は、私よりも若くてかわいらしい女の先生なのだ。でも、ちゃんと(?)一番力の少ないところに貼ってあった。

その次に、「みんなの貼った短冊の中で、目に見えないものはありますか?」と質問した。最初は「風がもみじをもちあげる」や「空気が紙飛行機をもちあげる」が出されていたが、話し合いで「もみじや紙飛行機は見えるよ。」ということになった。「楽器の音が声をもちあげる」と「きもちがうたをもちあげる」が残った。そして、その二つを第四連にして、詩を構成しようということになった。(写真参照)

第四連の「うんとこしょ……」をどう読ん



だらいいか質問した。「ふつうに」「少し弱く」などに続いて、「やさしく」「思いやりをもって」などが出された。力強さではなく、心をこめて読む必要があることを確認した。二年一組の「うんとこしょ」ができあがった。テープに録音してみんなで聞き合おうと、とても真剣に楽しく聴き入っていた。

### 三 詩を音読することの効果

今回は低学年で、詩を音読しながらまるご

とその作品を感受し、そして、感性を生かしながら創作し、どう読むか工夫することで解釈を深めつつ、楽しく音読していくという繰り返しによって作品を理解していく実践を試みた。

以前にこの方法で高学年にも実践したことがある。六年生、谷川俊太郎の詩「生きる」である。「生きていくということ」「いま生きているということ」と、リズムとテンポをともなつて順次昇華していく谷川の表現方法が内容を支えているこの詩を、子どもたちの感性によって読み解きながら、そのクラス独自の「生きる」という詩を創っていく作業は、とても楽しいものであった。

#### 注

「虫食い」の実践はインターネットTOSランド伴一孝氏の実践を参考に行った。

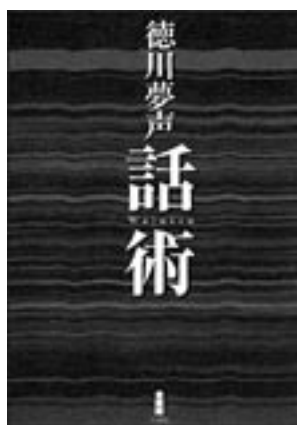
かわばた ひでなり 十六年間の中学校教員生活を  
経て小学校へ異動して五年目。国語科教育における  
群読指導の可能性を模索中。

# 名著再読

## 徳川夢声

# 『話術』を読む

兵庫教育大学名誉教授 長谷川 孝士



『話術』 徳川夢声  
白揚社／1949年  
(\*表紙は2003年刊のもの)

年に新版第四刷が発行された。

『話術』（新版）の目次―。

第一部 総説

第一編 話の本体

第二編 話の根本条件―1 人格と個性

2 言葉の表現 3 声調と口調

4 間の置き方 5 ハナシの分類

第二部 各説

第一編 日常話

第一章 座談 第二章 会談

第三章 業談

第二編 演壇話

第一章 演説 第二章 説教

第三章 演芸―童話／講談／落語／

漫談／放送

第三部 話道の泉

徳川夢声著『話術』（第一版第一刷―昭和二十四年六月二十五日、白揚社）の第二部第二編「演壇話」の中に次のような発言がある。

「高校・中学の先生方よ、もっと面白く授業をして下さい。先生が病気で休講すると、生徒が大喝采では困りますね。小学の先生方よ、次の時代の国民を、強く、明るく、

正しき文化人にする教育の基礎は、あなた方に委せられているんです。子供は例外なくオハナシが好きなのであります。どうか、どの時間も面白くハナシで、教えて頂きたい。ついでには、皆さんのコトバですが、どうか標準語でお願いいたします。」

本書は、教育の「話術」についての本ではなく、「はしがき」に次のように書かれていて、「日常の座談」の発展を主として求めて執筆されたものである。

「話術をもっと修練し発達させ、日本コトバの長所を、存分に發揮させて、正しい、強い、千変万化の表現力を、養わねばならない。舞台や、演壇でする話術も、もちろん研究の必要があるが、私は、日常の座談が、もっと深く研究されてよいと思う。」

昭和三十二年に第二版、さらに昭和三十七

第四部 附説―第一編 話題について

第二編 テクニクについて

「国語教室の人」(西尾実先生のことば)と  
なつて「教育話法」について強い問題意識を  
持つようになった。毎日の国語教育実践にお  
いて、学習者の発達段階や実態に即した音声  
の大きさ、速さで話すこと、また説明、発問、  
読み聞かせなどにそれぞれに適した音声や話  
法を身につけるようにと努めていたところに、  
本書を読んで、大いに学ぶところがあつた。

とりわけ自分の「教育話法」のあり方に大  
きな影響を与えられたのは、第一部第二編話  
の根本条件」の中の「4、間の置き方」の部  
分であつた。

「ハナシにとつて、コトバを並べることは  
絶対条件であるが、そのハナシに生命を与  
えるのは、(中略) いろいろの条件が必要  
であります。そしてその生命を澁刺<sup>はつら</sup>として  
元氣あらしむるためには、も一つ肝腎な条  
件が潜んでいるのです。」

と言つて、次のように述べている。

「ハナシというものは、喋るものですが、  
そのハナシの中に、喋らない部分がある。  
これを「間」という。こいつが、実は何よ  
りも大切なもので、食物に例えていうと、  
ビタミンみたいなものですが、直接、

ハナシのカロリーにはならないまでも、こ  
のビタミンMが欠けては、栄養失調にな  
ります。」

「ただ生理的に無神経に、言葉と言葉との  
区切れをつけるのでなく、張りつめた神経  
を鋭敏に働かして、電波探知機(レーダー)  
の如く、正確無比に適不適を計るところの  
『沈黙の時間』なのです。」

「ハナシに限らず、芸術と名がつくものに  
は、音楽は元より、美術、彫刻、文学、演  
劇、みな『マ』が、重要な位置を占めてい  
ます。目立たない、目に見えない重要な位  
置をです。」

徳川夢声氏は、「マとは沈黙なり」では「誤  
解を生ずるかも知れません」、つまり「間」  
とは単なる「沈黙」ではない、「マ」とは虚  
実のバランスなり。」と言ひ、「ハナシをする  
場合、コトバだけの研究では足りません。そ  
のコトバにもたせる『マ』の研究、話してい  
る間の表情動作すべてにわたるバランスの研  
究、そこまで行かないと満点とはいえませ  
ん。」と述べている。

徳川夢声氏は本書で次の「演説心得六カ条」  
を主張している。

「第1条 自分が言わんとすることを、心の  
中に順序よく積み重ねておく。」「第2条 聴

衆の状態によつて、言語態度など変通自在に  
加減する。」「第3条 場所の状況如何によつ  
て、臨機応変たること。」「第4条 自分性来  
の声、すなわち地声をよく鍛錬すること。」「第  
5条 会場の広狭、聴衆の多少によつて、声  
の調節を計ること。」「第6条 聞かせるのが  
半分、観せるのが半分と心がけること。」

第6条の「観せる」は「コトバの他に、表  
情や、動作や、服装」などの力を借りる必要  
をさしている。私は、これを「板書」や「視  
覚的資料」などととらえた。そして同時に、  
ここに「間」のとり方が深くかわつてい  
るのである。

本書の「間の置き方」の章は、次の二文で  
結ばれている。

「――『話術』とは『マ術』なり。」  
「――『マ』とは動きて破れざるバランス  
なり。」

徳川夢声著『話術』は「教育話法」につい  
て書かれたものではないが、「国語教室」に  
生かされる実に多くのことを語っている。

はせがわ たかし 兵庫教育大学名誉教授。著書に  
『豊かな国語教室―原理・方法の探究』(右文書院)、  
『ひびきあう国語教室の創造』(三省堂)、『子規全集』  
八・二二・七巻(講談社)などがある。

# 「等身大」をもとめて

明星大学 宮川 健郎

日本の現代児童文学の出発期の作品、たとえば、『龍の子太郎』（松谷みよ子、一九六〇年）の太郎や、『山のむこうは青い海だった』（今江祥智、一九六〇年）の次郎は、社会変革や自己変革をしていく主人公だった。以前は、こうした理想の子ども像を描いた作品が、子どもの成長を願う大人たちによって、子どもたちに手渡されていったのである。ところが、九〇年代以降は、変化が見られるようになった。

『四月の野球』は、ギャリー・ソトの一九九〇年の短編集。ソトはメキシコ系アメリカ人の作家だが、邦訳の訳者もいうように、マイノリティの文学でありながら、作品は、むしろ一般性を獲得している。つまり、日本の児童文学のあり方ともつながっているのだ。

表題作「四月の野球」のマイケルとジェスの兄弟は、三年連続でリトルリーグの入団テストに落ちる。「なんでおれが受からないんだ」——今回、兄のマイケルは、守備もバッ

ティングもうまくいったのだ。結局、兄弟は、学校の友だちがメンバーになっている別のチームに入る。それは、とても弱いチームで、ふたりは、野球そのものを徐々にあきらめていく。子どもたちには積極的に生きていくってほしいけれど、何もかもうまくいくわけではない。あきらめて、現実と折り合いをつけるというのも、実は、子どもの文学の重要な主題なのではないか……。

長谷川集平の絵本『ホームランを打ったこ



『四月の野球』  
ギャリー・ソト=作／神戸万知=訳  
理論社／1999年



『ホームランを  
打ったことのない君に』  
長谷川集平  
理論社／2006年

とのない君に』のルイは、チャンスに大振りしてゴロ。試合は負けてしまう。ホームランだと逆転だったのに……。もつとバッティングがうまくならない。ルイは、試合でホームランを打ったことがないのだ。「いきなりは無理さ」——仙ちゃんがいった。出島商業野球部のレギュラーだった仙ちゃんも、試合ではホームランを打つことがないという。

ここには、多くの子どもにとって等身大の主人公が描かれている。そして、等身大の自分が見出せたとき、あらためて生きることがはじまるのだ。仙ちゃんが、またいう。——「夢見るだけにしとくのかい。」ルイは思う。「ありがとう。ほく、いつかホームランを打つよ。でも、その前にまずヒットだね。」

みやかわ たけお 日本児童文学専攻。著書に『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会）など。





## メディアとは何だろうか

独立行政法人メディア教育開発センター 堀田 龍也

メディアとは何だろうか。この問いへの回答は容易ではない。

工学系の分野では、メディアとはデータを保存する媒体を指すことがある。たとえばCD-ROMはメディアであるという解釈だ。ではパソコンはメディアかという、これがまた難しい。データを保存するのはパソコンではなくハードディスクだ。そうすると、ハードディスクがメディアで、パソコンはメディアではないということになる。故にこの定義は不十分だ。

同じく工学系の分野における別の定義として、メディアとはデータを処理する装置だというものがある。パソコンは確かにデータを処理する。テレビも、電波によって送られてきたデータをディスプレイに表示するという処理をしている。しかし、では新聞はメディアかということになると、また立ち止まってしまう。新聞は確かに処理されたデータが掲載されているし、それを自宅に届けるという処理をしてくれているとも拡大解釈できるが、掲載されている情報を処理しているのは新聞そのものではないし、届けてくれているのも人である。故にこの定義もまだ納得が行かない。

やや社会学系に寄った分野では、情報を伝達する装置をメディアと呼ぶことがある。この定義なら、新聞は確実にメディアだといえる。テレビも、インターネットも、最初に取り上げたCD-ROMも、確かにメディアだ。

ただ、ここでもまた気になることがある。人が情報を伝達することがある。すると人はメディアだということになる。人は装置ではないからメディアとは言わないということにするならば、では新聞は装置なのかという疑問が生じる。故にこの定義でもまだ十分ではない。

筆者はこのコラムで、メディアとは何かということを定義したいわけではないし、もとよりその力量はない。ただ、世の中で多く使われている「メディア」という用語が、考えてみればこんなに曖昧にとらえられているという現実を示したかったのだ。

私たちは日々メディアに囲まれ、メディアとともに暮らしている。しかしメディアとは何かということをしつくり突き詰めて考えたことはないのではないか。それでよいのだろうか。

メディアの形は日々変わっていく。私たちはメディアから受け取る情報を頼りにさまざまな判断をする。仕事や生活でメディアを使いこなす。私たちは確実にメディアの影響を受けている。そんな私たちだからこそ、今一度、メディアについて議論してみてもどうだろうか。

ほりた たつや 文部科学省参与などを併任。政策立案から教育現場の実践指導まで、情報教育に関するあらゆる場面に精力的にかかわっている。

## 働く「かっこいい」おとなたち

日本子どもの本研究会理事  
三芳町立中央図書館司書  
代田 知子

小学校四年生のブックトーク授業で、町の豆腐屋さんが出会う不思議な物語を六話収録した『ねこじゃらしの野原』（安房直子作、菊池恭子絵、講談社、一九九五年初版）を紹介したときのこと。「このお豆腐屋さんとは、とても働き者だね。毎朝、早起きをして豆腐を作り、昼は大鍋であげとあつあげと、がんばりもどきを作り、夕方は自転車で売りに歩き……」と始めたところで、一人の男の子が「つまねえ人生だなあ」と言い捨てました。「もっと、ぱっと生きろよな！」と。茶々を入れられることには慣れていきますから、そこは「そう？ 私はこのお豆腐屋さんのこと好きよ。だつてね……」とかわして続け、ブックトークは無事成功したのですが、はじめに働く者を「つまねえ人生」と言う、あのことばが胸につきささりました。そしてふと思ったのです。今の子は、尊敬できる生き方をする親以外のおとなを見ていないのではないかしらと。

昔はあちこちで仕事をする職人さんを見かけたものです。太い針をぶすぶす刺して畳を張り替える畳屋さん。下書きもせず大看板の絵を描きあげる看板屋さん。店頭にいないので奥をのぞくと、汗をかいて大鍋で大豆を煮ていた豆腐屋さん。子どもの私は彼らの仕事ぶりを見るたびに、おとなってすごいと思

い、自分もいつかすごいおとなになりたいと未来に向けて夢をふくらませていました。

あの日の授業以降、私は以前にも増して子どもたちに、いろいろな分野でかっこよく働くおとなの姿が描かれている本を紹介するようになりました。最近私がよく読み聞かせているのは、食肉市場で肉牛を解体する職人の見事な腕前が披露される『きみの家にも牛がいる』（小森香折作、中川洋典絵、解放出版社、二〇〇五年初版）。小学校低学年から中学生まで引きつけるユニークで楽しいノンフィクション絵本で、社会科の授業にも活用できます。



しろた ともこ 図書館や学校、保育所などで、子どもたちに読み聞かせや語りやブックトークができる今の仕事が大好きです。

著書…『読み聞かせわくわくハンドブック』（代田知子著 一声社 二〇〇二）

DVD…『絵本・読み聞かせ おうちで実践編 1』  
2』（代田知子監修・出演 アスク 二〇〇五）

平成18年度版中学校教科書『現代の国語』 訂正のお知らせとお願い

平成18年度版『現代の国語』に訂正の箇所がございます。ご指導の際は、ご留意ください。また、すようお願い申し上げます。

なお、平成19年度は、訂正した教科書を供給いたします。

学年	頁	行・箇所	平成18年度版	平成19年度版	備考
1	8	7	百姓たちは踊りあがって喜んだ。	百姓たちはおどりがあって喜んだ。	
1	133	上15「やってみよう」	②4足場を固める。	②4個別に相談する。	
1	209	「ふかまるの読書 変装文を見破れ」 枠内最終行	水を飲まずに暮らしている	水を飲まずに暮らしている	
2	18	下13	近藤芳美 [1913]	近藤芳美 [1913-2006]	
2	71	下9	城春にして草木探し	城春にして草木探し	
3	41	上「漢字のひろばへ」 枠内	34 締 38 錯 38 迎 35 撫 36 析 35 媒 38 賢 38 融	34 締 35 撫 38 錯 36 析 38 賢 35 媒 38 融	漢字の掲載順を変更。
3	127	上8 「文法のひろば①②」 助動詞	2 この絵には 力強さが感じられる。	2 この絵には 力強さが感じられる。	傍線を延長。
3	127	上10 「文法のひろば①②」 助動詞	4 朝 七時なら 起きられる。	4 朝 七時なら 起きられる。	傍線を延長。
3	205	上 最終行	新川和江「名づけられた葉」より	新川和江「名づけられた葉」	文言を削除。

編集後記

二〇〇七年の幕開けに『ことばの学び』二二号をお届けいたします。二〇〇七年といえば、以前から指摘されているのが「二〇〇七年問題」です。団塊世代の退職による様々な影響が懸念されていますが、一方で、新卒採用数の拡大という新しい変化も期待されます。今後は、ベテラン勢の知恵と工夫をいかに若手へ伝えていくかが、さらに重要となるのではないのでしょうか。

本号では特集テーマを「学ぶ意欲を引き出す工夫」とし、小学校・中学校での取り組みをご紹介します。編集を進めるにつれ、工夫とはまさに一朝一夕では得られない、日々の研究と実践によって導き出されていくアイデアだと感じました。今後多くの先生方とともに、新しいことばの学びのあり方を考えていければ幸いです。(S)

三省堂 国語教育 11月号の学び 第12号

二〇〇七年二月一四日発行  
定価 一〇〇円(本体九六円)  
編集・発行人 八幡 統厚

〔発行所〕 株式会社 三省堂  
〒一〇一―八三七―一

東京都千代田区三崎町二―二二―一四  
TEL 〇三(三三三三三〇)九四二七〔編集〕  
振替 東京 〇〇一六〇―五五四三〇〇  
泰成印刷株式会社  
〔印刷所〕 東京都墨田区両国三―一―二二

三省堂の本

21世紀初! 紙+デジタルでふたつの使い方誕生!!  
— 書籍の購入でwebでも利用可能  
日本語の現在を映す驚異の23万8千項目  
最新の一冊もの[国語+百科]大辞典



# 大辞林

第二版

松村明[編]

創業125年記念特別定価 7,665円(本体7,300円+税/2007年5月末日まで)  
定価 8,190円(本体7,800円+税)



## 「読解力」とは何か

リーディング・リテラシー  
PISA調査における「読解力」を核とした  
カリキュラムマネジメント

FyPROJECT  
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校  
FYプロジェクト 編

定価: 1,995円(1,900円+税)  
B5/112ページ

これからの時代に求められる「読解力」の育成は、各教科・総合的な学習の時間など、学校全体の取り組みによって実現される。確かな学力につながるカリキュラムマネジメントと具体的な授業を提案する実践書。



事例で学ぶ

## Netモラル

～教室で誰でもできる情報モラル教育～

堀田龍也 編著

定価: 1,500円(1,429円+税)  
A4変/208ページ

急激なIT社会の進展にともない、インターネットの利用者もどんどん低年齢化している。子どもたちがインターネットを適切に利用する方法を、ネットモラル教育の第一人者が理論と実践をもとに解き明かす。



## 学校力

時代をひらく方略と組織マネジメント

カリキュラム研究会 編

定価: 2,310円(2,200円+税)  
A5/224ページ

学ぶ組織としての「学校力」が今まさに求められている。学力向上、一貫校教育、キャリア教育、そしてカリキュラム開発など、学校運営と改善の方策を示した提案書。重要語句は脚注でさらに詳しく解説。

詳しくはwebサイトをご覧ください ➡ <http://www.sanseido.co.jp/>

回覧

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

三省堂  
国語教育

ことばの学び

Vol.12

特集 学ぶ意欲を引き出す工夫